
当院透析室のスタッフにおけるストレス調査

細谷芽衣、篠田有紀子、松岡淳子、近江 薫、菊谷祥弘^{*}、宮形 滋^{**}
中通総合病院 血液浄化療法部、同 内科^{*}、同 泌尿器科^{**}

Stress research in our dialysis center

Mei Hosoya, Yukiko Sinoda, Junko Matsuoka, Kaoru Omi,
Kikuya Yoshihiro, Sigeru miyagata
Nakadori General Hospital

<はじめに>

透析は体外循環の為、急変しやすく患者観察や機械操作などの特別な技術を必要とする。さらに、全員が同じ部屋で同時透析のため、プライバシーへの配慮が行い難くストレスを感じやすい状況で働いていると考える。当院では、約同数のNsとCEが協働しているため、NsとCEのストレスの感じ方や内容に差があるのではないかと思い、スタッフのストレスに対する実態調査をした。

研究対象：Ns 12名、CE 9名

調査方法：無記名アンケート（船木ら¹⁾のアンケートを参考に作成)

透析室の勤務体制：日中・夜間の2シフト体制。病床数同時透析は34床、外来患者77名、導入目的や他施設から加療目的の入院患者が1日平均7名。時間外の緊急対応やICUなどで透析を行う際はCE1名で担当。日中にICUに行くときや特殊血液浄化を行うときには、CEがその日の担当箇所と両立し1人で行っている。透析経験年数は、NsとCE合わせて3年以下が11人で半数以上いる。日中は、CEとNs2人1組で8～10名ほどを受け持ち、協働し、プライミングから穿刺、患者観察、終了までを行う。

<結果>

ほとんど全員がストレスを感じており、特にNsが強いストレスを感じていた（表1）。ストレスの症状では、イライラするという回答が多く挙がった（表2）。穿刺では過半数以上がストレスを感じていた。また、3年以下のスタッフがより強いストレスを感じていた。患者急変時の対応は、Ns・CEどちらも強いストレスを感じていた。警報時の対応は、CEがストレスを多く感じていた（表3）。患者を受け持ち、全身状態の把握に努め透析条件の検討をしている。しかし、患者が自分のその日の担当ではない時も把握しなくてはならず、大変だという意見が多くあった。患者とのコミュニケーションは、日常の会話から治療に関することなどを指しているが、5割以上のスタッフがストレスに感じていた。NsとCE特別差はみられなかった（表4）。

表 1. 仕事中にストレスを感じるかについて

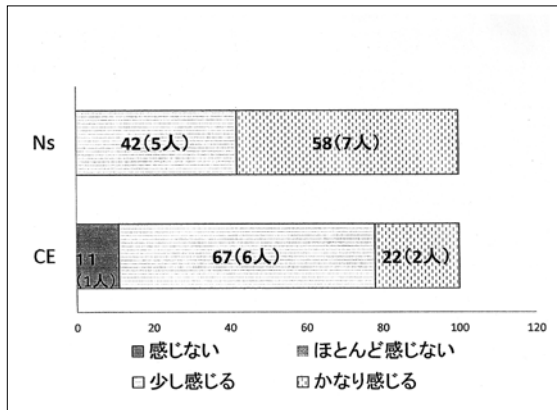


表 2. ストレス症状

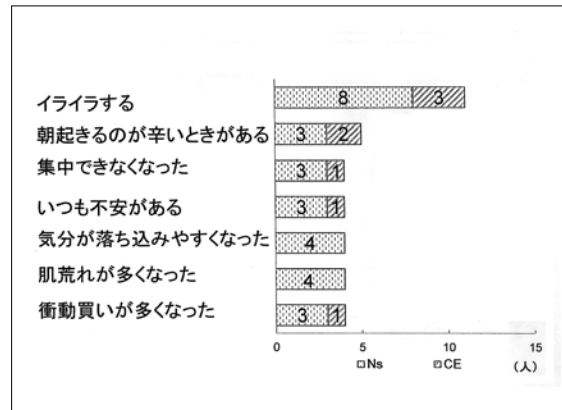


表 3. ストレスの内容

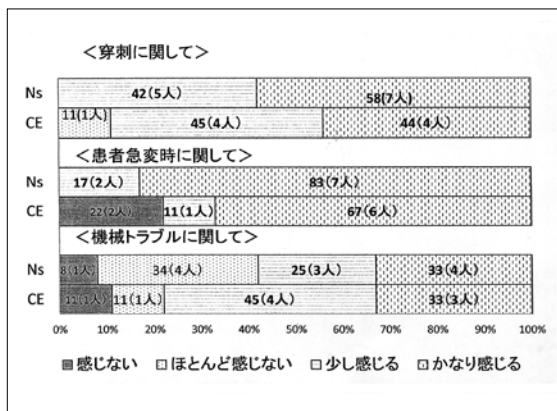
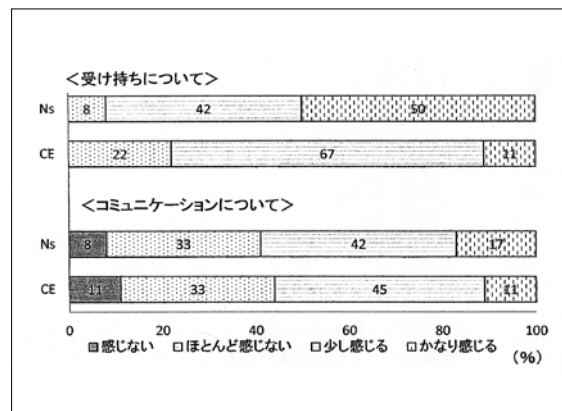


表 4. ストレスの内容



<考察>

NsがCEよりストレスを強く感じており、感じている内容にも違いが見られた。それは、フットチェックなどの観察など限られた時間内で行っているためだと考えられ、それぞれの専門性や業務内容の違いのためだと考えられる。しかし、職種に関係なく同じようにストレスを感じているものもあった。穿孔や急変時の対応など協働で行っている業務は、失敗をしないか時間内で穿孔が終わるかなどがあった。さらに、急変時の対応があまり行うことが無いため自信がないなどが挙げられた。時間や技術的な不安、プレッシャーなどにより職種関係なく同じようにストレスを感じていると考えられる。また、表にはしていないが経験年数3年以下では急変時など対応をする機会がなく対応の仕方が分からないなどの意見があった。そのため、現在1年に1度急変時の対応について学んでいるが、今後も機会を多くして学ぶなど技術向上しストレス軽減につなげていく必要があると考える。

<まとめ>

当院透析室におけるストレスに関して、職種間でストレスに違いが見られた。しかし、今回の調査では年齢による違いは見られなかった。

今後ストレスの軽減の為、業務改善を検討していく必要がある。また、スタッフ全員で連携してカバーしていくことが大切である。

<引用・参考文献>

- 1) 船木弥生、鎌田きん子、山田かな、伊藤真紀子、松橋美結希、金睦子、鎌田恭子、菅原美保子：腎臓病センター看護師の抱えるストレス～アンケート調査～秋田腎不全研究会誌 vol.8：49-52、2005
- 2) 金子純子：透析室に勤務する看護師の唾液アミラーゼによるストレス度の調査、日本腎不全看護学会誌 vol.12、No.2：86-90、2010
- 3) 大坪みはる：透析看護師のためのメンタルヘルス、医薬ジャーナル社